

江口聡へのリプライ

魚住洋一¹

ここでは、私の四篇の論文への江口聡の批判に対して、順を追ってリプライしたい²。

1. 江口の「あの感じ」?

江口がまず取り上げたのは、「性的欲望とは何か?——現象学と概念分析」である。この論文の狙いは、1960年代後半以降、英米の哲学界で行われたセックスについての議論を、トマス・ネーゲルやロバート・ソロモンなどの「現象学的記述」、および、アラン・ゴールドマンやアラン・ソーブルなどの「概念分析」という相反する二つの動向に焦点を当て、それらを互いに突き合わせるかたちで、両者の問題点を明らかにしようとするところにあった。しかし、江口が問題としたのは、ソーブルの主張は社会構築主義の批判には耐えられないと述べたこの論文の結論部分のみであり、しかも彼は、私の論文には、「〈社会構築主義〉なるものがいかなる立場のものであるかの説明は一切ない。そのため、魚住の論点を評価するのはむづかしい」と語り、私が註で引用しただけの「セクシュアリティとは〈無定義概念〉である」という上野千鶴子の言葉への長々と続く批判をもって私への批判に替えようとするのだが、それは話の摩り替えであるだけでなく、私が書いたことをよく読んでいないからこそ、そうした発言になるのではないか。彼が「一切ない」と非難する社会構築主義について、私は、それについて語ったソーブル自身の言葉を引用しながら、現に説明しているのである。

江口がもっぱら問題にするのは、私が以下のように書いた箇所——「[ソーブルは]〈性的興奮と性的快樂に関する主観的経験〉をあらゆる性現象に共通の特徴と見做す。しかし、歴史的、文化的に異なるさまざまな性現象の根底に、すべての人間に共通するヒューマン・ネイチャー〈人間本性〉として、歴史や文化に汚染されないような生まの〈性的興奮と性的快樂に関する主観的経験〉を見出すことができるとはとても思われぬ。むしろそうした主観的

¹ 魚住洋一(うおずみ よういち)。京都市立芸術大学名誉教授。龍谷大学元教授。

² なお、江口が取り上げた私の諸論文は、私のホームページに掲載されている。

<<http://w3.kcua.ac.jp/~uozumi/papers.html>>

経験は、そのつどすでに歴史的、文化的な再一構造化を被ってしまっているのではなからうか」という箇所である。そして江口は、「性的な興奮や欲求のあの感じもまた、当人がそれを言語的に意識するときには、その当人を取り巻く文化的・社会的・歴史的な影響を背景にしてでなければありえない」ことは認めながらも、「しかしあの感じそのものが社会的構築物であるということがありえるのかどうか、私にはわからない」と述べ、そして「性的な感覚も少なくともある程度は〔人間に〕共通していると考えてもよい」と結論するのである。——しかし、何の説明もなしに「性的感覚のあの感じ」と述べる江口は、社会学者が用いる「セクシュアリティ」の無定義性について糾弾したばかりなのである。江口は「あの感じ」とさえ言えば、彼が感じる極私的な「感じ」を私たちが了解してくれるとも思っているのだろうか。そもそも、それがどんなときに感じられるどんな感じなのかを言語化しなければ、私たちはそれを了解することなどできるものではない。そして私たちがそれを言語化するや否や、「あの感じ」は、何を「性的」と見做し何を見做さないか、「性的」と呼ばれる種々の事柄をどう階層づけるかを規定する意味づけの枠組み——「文化的・社会的・歴史的」な枠組みのなかに組み込まれることになり、江口のいう「あの感じ」の清浄無垢さを失うのである。生まのままの「あの感じ」など、江口の「心のなか」というブラックボックスのなかにしかありえないものである。私たちに「共通する」ものがあるとすれば、それは彼のいう「あの感じ」などではなく、それを象^{かたど}る「言葉」以外にはない。

さらに言うならば、江口は、彼がその考えを支持するソーブルが「性的行為」という概念について、「誰もが納得するような、超歴史的・汎文化的定義」が可能だと主張しているのではない、とも述べている。だとすれば、彼が示そうとしているのも、特定の「文化的・社会的・歴史的」な枠組みに制約された「性的行為」の定義であることになる。それが、彼が非難する上野千鶴子のいう「人々が〈セクシュアリティ〉と呼び、表象するもの、そしてその名のもとで行為するもの」といったいどう違うというのだろうか。

2. パーリアの「お言葉」

江口は、私が「メランコリーとしてのジェンダー——バトラーとフロイト」や「同性愛者の〈誕生〉——アイデンティティとセクシュアリティ」などで、ミシェル・フーコーやデイヴィッド・ハルプリン、ジュディス・バトラーなど社会構築主義者の「お言葉」を文字通り「お言葉」として無批判に用いていると述べている。実は、私は、かつて田村公江『性の倫理学』(2004年、丸善)へのコメントのなかで、彼女がラカンの「お言葉」をお題

目のように唱えながら、しかもラカンならけっして口が裂けても言わないようなとんでもないことを語っていたことを揶揄したことがある³。そのことを引き合いに出しながら、江口は、私も田村と同じ穴の貉^{むじな}ではないかと言うのである。

私が「メランコリーとしてのジェンダー」において企てたのは、バトラーのフロイト解釈をフロイト自身の議論と互いに突き合わせることによって、両者の議論に内在する矛盾を露呈させることであった。私が行なったのは、両者の内^{内的}的批判であって、そのため、私はあえて両者の議論に即しつづ論を展開したのである。たしかにバトラーは——江口が指摘するように——いわゆるフランス・ポストモダニズムのさまざまな思想を異種混交的に取り入れようとするため、彼女の議論はその難解さを不必要に増すとともに、その首尾一貫性を保ちえないものとなってしまっている。しかし、私が問題としたことの一つは、そうした彼女の議論の矛盾——「法^{ビフォー}のまえ」、つまり、「象徴界」に先立つものとしての「現実界」の存在など認めていなかったはずのバトラーが、フロイトやラカンの「無意識」の概念を無節操に取り入れることによって生じた矛盾を明らかにすることだったのである。ただ、この論文では、私がバトラーとフロイトの思弁の泥沼^はに嵌まってしまった感があるのは否めない。そのことが、江口が言うように、「バトラーの難解な議論の解説・解釈を押し付ける」ことになり、「田村のラカン用語の濫用」と五十歩百歩だということになるのかもしれない。

「同性愛者の〈誕生〉」について江口が問題視するのは、「性の好み」が人々のアイデンティティを決定するものとする奇妙さを「食の好み」と対照しながら述べたハルプリンの議論を紹介した箇所である。江口は、ベジタリアンの例を持ち出し、ベジタリアンであるということは、そのひとの宗教的／倫理的信念と密接に関係しており、これもまた「性の好み」と同じく、そのひとのアイデンティティを規定しているのではないかと述べ、「ほんのすこし立ちどまってみれば奇妙であるとすぐにわかるハルプリンの議論をそのまま用いるのは、それを〈お言葉〉のようなものとみなすことではないのか」と結論づけている。——しかし、そう言うのであれば、江口自身もまた「同じ穴の貉」であろう。というのも、彼自身断っているように、江口の主張は、カミーユ・パーリアが『セックス、アート、アメリカンカルチャー』(野中邦子訳、河出書房新社、1995年)で述べた主張の「受け売り」だからである。この著作でカミーユは、ハルプリンやフーコーとその「無批判」なフォロ

³ 「ないものねだりの／いわずもがなの田村公江『性の倫理学』へのコメント」、第75回京都生命倫理研究会(龍谷大学文学部、2005年6月25日)での発表。<<http://w3.kcua.ac.jp/~uozumi/tamura.html>>

ワーを激しく非難しているのだが、江口は、彼女のその「お言葉」を鸚鵡返しに繰り返しているだけなのである。

コンテキストを無視してひとの揚げ足を取るのはパーリアお得意の遣り口だが、そのパーリアも、そして江口も読み違えているのは、ハルプリンが述べようとしていたのが同性愛者差別という社会的問題であって、何が人々のアイデンティティを規定しているのかという心理的問題ではなかったということである。つまり彼は、現代社会において人々が「同性愛者」としてのアイデンティティを「押し付けられ」、差別され排除されることの奇妙さを指摘しようとしていたのである。今日、豚肉を食べない人々が社会的に差別されることがあるとしても、それは彼／彼女がキリスト教社会では異教徒とされ、「テロリストだ！」とのいわれもない罵倒の的とされる「ムスリム」だからであって、その食習慣からではないであろう。江口は、能天気にもパーリアの口真似をして、どんな食習慣であるかということから「我々はその人物がどんな人物か想像しないだろうか」と述べて、それでハルプリンや私を批判したつもりになっているようだが、そもそもそんな学術的なことが問題になっていたわけではなかったのだ。

さらにまた、江口は、伏見憲明の『ゲイという経験』(ポット出版、2004年)の一節を引用しながら、性的指向が「先天的か社会的学習の結果か、ということは、実は差別その他と関係がない」と述べているが、どうも彼はその言葉によって社会構築主義を批判したつもりでいるらしい。しかし、これまた論点がずれている。——たとえば、「同性愛の原因が何か」と問われたフーコーは、「この問題については、いっさい言うことはありません。ノー・コメント」と直ちに答え、彼が問題としたのが同性愛の「原因論」——「生まれか育ちか」ということではなく、人々が「同性愛者」というものをいかにして表象するようになったかということだと明言していたのである。ハルプリンもまた、「同性愛者」とは、異性愛者たちが自らを穢れなき主体として立ち上げるためにでっち上げた「想像上の他者」であり、社会的不適応、先天的疾患、道徳的墮落、性的倒錯といった相矛盾する雑多な名目のもとに「同性愛者」だとの烙印を押されたのは、誰であろうが異性愛者とはどこかが違う人々だったことを指摘し、同性愛者が差別されることに「生まれつきであろうが、選んだものであろうが、それは関係ない」と語った伏見憲明とほとんど同じことを述べていたのである。——ところが、江口は、「この伏見の立場は私にはもっともなものに思われる」と言うのである。では、なぜハルプリンの立場は「維持することが難しい」などと彼は語るのだろうか。

なぜかは分からないが、おそらく江口には「社会構築主義」というものへの一種の「反感」があらかじめあるのだろう。そして彼は、パーリアの扇情的な言葉に煽られて、自らが作り上げた「社会構築主義」の虚像を攻撃しているだけのように思われるのだが、どうだろうか。

江口は、「性」の問題に関して「実証的調査の厚みが、アームチェア哲学者の思弁よりもはるかに多くのことを我々に教えてくれる」と語っている。たしかに、彼の言う通りかもしれない。しかし、あえて言うならば、「現場」が重要だということは十分に認めたうえで、私はあえて「アームチェア哲学者」であること——いわば、シャーロック・ホームズではなく、エルキュール・ポアロでありたいという立場を貫きたいと考えている。

揶揄めいたことを色々語ったが、アラン・ソーブルなどセックスに関する英米哲学の動向を私に教えてくれたのは、他にもない江口聡なのであって——ただし、ここでもう一人、北海道大学・桜美林大学名誉教授、坂井昭宏の名を付け加えておかねばならないが——そのことについて、兩人への謝意を最後に記しておきたい。